

# 保育者養成におけるJFA公認キッズリーダー資格を 活用した実践の記録

## Records of Practice Utilizing Kids Leader Qualification of JFA Official Recognition in Nursery Teacher Training

時本 英知

Eichi TOKIMOTO

青森中央短期大学幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

### はじめに

我が国は大幅な人口減少社会に足を踏み入れようとしている。国や地方自治体はその影響による大都市圏と地方都市の格差を低減させるために様々な取り組みを行っている。それは高等教育にも向けられ、例えば「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC +）」などが推し進められるようになった。今、大学は地域課題に対応すること、それに対応する人材の育成することが求められている。これは本学のような保育士や幼稚園教諭、保育教諭を養成する保育者養成校においても同様であり、地域の保育に関する課題に向き合い、それを解決できる人材を育成することを目指さなければならない。

まず、現在の青森における地域課題として健康問題があり、青森県の平均寿命は全国最下位の状態が続いている。この問題は食事や喫煙などの複数の要因が重なっているが、そこには運動面の要因もある。運動面の要因には幼少期の運動のあり方についての課題も含められており、地域課題に対応する保育現場の課題の一つと言えよう。

学校保健統計調査によると青森県は5歳以上の肥満傾向出現率が全年齢で全国平均より高く<sup>1</sup>、この状態は保育所に通う3歳から5歳の子どもも同様に高い<sup>2</sup>。幼児期の運動習慣はその後の少年期の運動継続に影響を与えやすく、また、幼少期に運動を楽しんだ経験が多いと大人になっても運動を生活に取り入れる可能性が高くなる。このことを考えると保育の現場で楽しみながら運動経験を積み重ねることは今の子ども健康だけではなく、将来の運動習慣の獲得につながる重要なベース作りとなり、青森における地域課題の解決にもつながっていくと考えられよう。そのため、保育者は運動遊び

1 青森県企画政策部統計分析課 2016年1月発表資料「平成27年度学校保健統計調査速報（青森県分）」([http://www6.pref.aomori.lg.jp/tokei/document\\_view.php?sheet\\_no=3766](http://www6.pref.aomori.lg.jp/tokei/document_view.php?sheet_no=3766)) 2016.12.22 閲覧。

2 朝日新聞（2015）「保育所の幼児肥満傾向」2015.8.27 朝刊に掲載。

を取り入れた保育を実践できる力を身につけることが必要である。

次に、保育の現状に目を移すと社会状況の変化による保育ニーズの高まりにより、青森においても保育者不足が課題となっている。この保育者の不足によって保育現場は即戦力となる保育者の確保が急務となり、これまで以上に保育者を目指す学生には高い保育力が求められるようになった。つまり保育現場は、保育者の量的な課題と保育者の質的な課題に直面しているのである。この二つの課題を合わせて解決していくことは容易なことではない。単純に考えても保育の現場に保育者が足りている状況であれば、保育者を目指す学生は就職に向けて努力し自らの力を高めていかなければならない。しかし、保育者が不足している状況であれば、人数を満たすことが優先され、時には就職する際にその能力が推し量られないまま保育者となっていくこともある。現に就職試験を受けた学生から「見学に行ったら内定をもらった」「面接が日常会話のような内容であった」という現状も聞かれる。これに対して保育現場は「とりあえず内定を出し、就職先の選択肢に入れてもらう必要がある」や「専門的な内容を面接で確認すると厳しい園という印象を与え、内定を辞退されてしまう」という理由が返ってくるのである。調査をした訳ではないが、そのような保育現場は増えている実感は強い。保育者を養成する視点で考えると、学生が保育力を高めるための一つのきっかけを失ってしまったことになる。

このような保育現場の現状であるが、就職すると学生には即戦力としての役割が求められ、高い専門性を発揮した保育実践力が求められる。さらに人材が不足している状態では「先輩の姿を見て覚えなさい」という状況で、上司や先輩保育者から指導を受けながら成長する機会も多くは期待できない。また、秋山（2011）は「養成校から受け入れた実習生や新卒者への指導の難しさを嘆ずる声も少なくなかった」<sup>3</sup>と述べているように、そもそも保育現場で人材を育成することはそう簡単なことではない。そのため保育者養成校としては卒業後に当たり前のように現場で育ててもらえるという考えを改めなければならない。

それでは保育現場の厳しい現状においても活躍できる保育者を保育者養成校は養成期間内でどのように育成すれば良いのであろうか。各保育者養成校では厚生労働省や文部科学省が定める内容をベースにカリキュラムが設定され講義・演習・実習が実施されている。特に実習は保育実践を通して学生が自らの保育実践力を確かめ、そのふりかきをもとに改善しながら高めていく絶好の機会である。ただ、学生の力量を考えると実際に実習で与えられる実践の機会は少なく、また、保育現場は日常的な保育や教育の流れがあるため、学生が行える実践には制約が多い。例え希望通りの内容を実践できたとしても、自らの実践をふりかえり反省点や課題点から計画を練り直し再度実践を行う機会を得られることは少ない。さらに、実習完了後の「保育実践演習」や「教職実践演習」などの演習科目において、模擬保育・模擬授業を展開しているがその学びにおいても限界はある。例えば実際に子どもに対し保育を行う実習では自らの働きかけに対して、子どもたちからダイレクトに反応が得られる。その内容から気づかされたり考えさせられたりすることは多く、模擬保育・模擬授業では補いきれない学びの要素が含まれているのである。だからと言ってそれらの内容を補う科目を大学独自で設定すれば良いかという、それも難しい。特に本学のような2年制の短期大学においては厚生労働省や文部科

3 秋山真奈美（2011）「現場で求められる幼児教育実践力とは？－幼児教育職務尺度の作成を通じて－」佐野短期大学研究紀要第22号,129-141,139頁参照。

学省が指定する科目を設定するだけで、時間割には余裕がなくなる。無闇に新たな科目を設定することは「単位の実質化」が伴わない状況となり、それぞれの学びが中途半端な状況になりかねないのである。このような状態に対して保育者養成の4年制化という議論も出てきているが本稿ではひとまず置いておく。

そこで本稿では以上のような地域課題と保育現場の課題、保育者養成校の課題を意識しながら本学が取り組んできた、青森県サッカー協会と協働しながら進めたJFA公認キッズリーダー資格（以降、キッズリーダー資格）に関連する取り組みについて報告する。

## 1. キッズリーダー資格講習会の導入について

キッズリーダー資格は日本サッカー協会が公認している指導者ライセンスの一つであり、「10歳以下の選手・子どもたちに関わる指導者・保護者等で体を動かすことの楽しさを伝える指導者の育成」を目指して講習会を実施している。資格は6歳以下を対象としたU-6資格、8歳以下を対象としたU-8資格、10歳以下を対象としたU-10資格に分けられている。本学では希望者に対して平成23年度よりU-6資格の講習会を年に1回行うようになり、平成27年度よりU-6資格に加えてU-8資格の講習会も実施するようになった。

講習会は地域の保育園や幼稚園に対して巡回指導を行なっている青森県サッカー協会キッズ委員会のキッズインストラクター2名が担当した。日本サッカー協会が定める講習は講義1.5時間、実技1.5時間であるが、本学では担当のキッズインストラクターと相談し保育の現場で活かすための内容を加えるため平成23年度は講義2時間、実技2時間で行った。その翌年の平成24年度には前年度の状況を見てさらに学生の学びを深めるために、講義2.5時間と演習1.5時間に加え指導実践3時間を行なった。この指導実践とは受講した学生が指導計画を作成し、学生を保育現場の子どもに見立てて活動を実践するものである。このように少しでも学生の保育実践力を高めるために本学の担当教員とキッズインストラクターが協議し、その内容にアレンジを加えながら現在も実施している。

しかし、その結果として時本・工藤（2016）は「学生は保育現場へ出た時に役立つことを期待し資格を取得していくが、いつしか取得したことに満足し、その力がしっかりと根付いていないことには気付いていないことが多い」<sup>4</sup>と指摘しているように、学生に対して保育現場等で活用する技術や実践力として講習内容を落とし込んでいるとは言い難い状態であった。つまり、保育士や幼稚園教諭を補完する資格講習会を実施するだけでは、保育者養成のカリキュラムと結びつけて地域課題の貢献につながるような保育実践力を身につけた人材を育成には不十分な状況が明らかとなった。その課題をもとにキッズリーダー資格講習会に加えて新たな取り組みを模索しはじめたのである。

## 2. 実践実習「スマイルチャレンジ」の実施について

前述したキッズリーダー資格講習会の課題を受け、資格を取得した学生の保育実践力の向上を目指し、青森県サッカー協会キッズ委員会が実施する活動にボランティア等での参加を促した。しかし、

<sup>4</sup> 時本英知・工藤朗詠(2016)「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み-JFA公認キッズリーダー資格を取得した学生に対する実践実習の実施-」青森中央短期大学研究紀要第29号,27-34,32頁参照。

特に本学のある青森市で行われる活動はイベント型の活動が中心であり、保育のように日常的で行われる連続した活動ではない。幼児の参加が少なく学生の保育実践力を向上させるという効果は極めて限定的であった。そこで本学では既存の活動ではなく参加する学生の保育実践力の向上につながるような活動の場の構築を検討することとなった。

そして、平成27年度より本学が中心となり青森県サッカー協会キッズ委員会、認定こども園青森中央短期大学附属第一幼稚園（以降、附属幼稚園）との連携のもと、試験的に保育現場での活動を想定した「就学前児童を対象とした運動遊びに関する実践実習」を行うこととなった。平成28年度からは本学の幼児保育学科では週に一回の保育に関連するボランティア活動やサークル活動、実践実習を行う時間を時間割上に設定することとなり、定期的な実践実習の実施が可能となった。それを機にキッズリーダー資格を取得した学生から希望者を募り、附属幼稚園の園児に対し年間8回程度の連続した運動遊びの指導実践とキッズインストラクターからフォローアップを受けられる場を設定した。なお、この取り組みは実践実習としているが保育実習や教育実習で見られるような緊張感を極力減らし、失敗を恐れず指導実践に取り組むことと、子どもが主体的に活動に参加し自然な笑顔を引き出す活動を実施することを目指して「スマイルチャレンジ」と名付けた。

この「スマイルチャレンジ」は次の流れで進めた。①年間目標の設定する（最後の活動で子どもにどうなって欲しいか）、②グループ内で協議し運動遊びに関する指導計画を作成する、③運動遊びに関する指導実践を実施する、④ふりかえりとキッズインストラクターと担当教員からのフィードバックを行う、⑤ふりかえりシートを作成する、⑥グループ内で協議し次回の運動遊びに関する指導計画を作成するという流れで年間8回の実践実習を実施した。また、活動後のふりかえりとフィードバックでは子どもの反応をもとに「なぜうまくいかなかったのか」を考えるだけでなく、「なぜうまくいったのか」も考えるように導いた。そして、その考えた内容を次の指導計画作成の際に活かし、実践でも意識させるようにした。

その結果、学生は活動中の子どもの様子に応じて子どもとの距離のとり方を変更したり、活動内容をその場で変更したりなどの行動が見られ、子どもが主体的に活動できるようにするという視点が持てるようになった<sup>5</sup>。さらに活動では運動強度を保てるように基本的な身体の動きを加えたり、子どもの失敗を目立たないよう工夫し運動に対して意欲が低下しないような配慮が見られたりした<sup>6</sup>。このように子どもたちに対し運動量を確保する活動を展開させるだけではなく、その後に活動の継続につながるような配慮ができるようになった。吉村（2008）は「スポーツでの失敗は、明らかに目に見える形で他の人の前に映し出される、という特徴がある。だからこそ辛く、それゆえに嫌いになってしまうことも往々にしてある」<sup>7</sup>と指摘している。本活動はスポーツではなく運動遊びという位置づけであるが、この特徴については運動遊びにおいても同様の特徴があると考えている。保育者は保育を通して運動の上手な子どもを育てるというよりは、運動が好きな子どもを育てることの方がその役

5 時本英知・工藤朗詠（2016）「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み（2）-幼児に対するサッカー活動の指導実践を導入した教育方法-」青森中央短期大学研究紀要第30号，85-94を参照。

6 時本英知・鈴木寛康・畑山朗詠（2019）「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み（3）-運動遊びの指導実践における幼児の活動状況から-」青森中央短期大学研究紀要32号，189-198を参照。

7 吉村功（2008）「どうやってスポーツの好きな子、得意な子を育てるか」児童心理第62巻第14号，34-39，金子書房を参照。

割としてはふさわしい。そういった視点に立つと本学が実施してきたスマイルチャレンジを通して、運動遊びの場面における一つの大切にすべき保育実践力を身につけられたと言えよう。その一方で、学生はどうしても子どもに運動量を確保させようと考え「歩く」「走る」「持つ」「運ぶ」の4項目の動きのみが繰り返し行われてしまい、子どもに多様な動きを繰り返し経験できる活動を展開する力の獲得という点では課題も見られた<sup>8</sup>。幼児にとっては心拍数の上がるような活動だけではなく、不慣れな動きも継続的に経験できる活動を盛り込むことの必要性について考えられるようにしていかなければならない。

このように運動遊びに関する実践実習はまだより良い実施方法や内容を模索している段階ではあるが、実施結果からの課題を改善することにより、参加する学生が地域課題に対応する保育実践力を高められる可能性は十分にあると考えている。その上で、大学としてはこれらの取り組みをより大きな地域活動に結びつけ発信する必要があるだろう。そしてその活動を通して地域課題に対する取り組みをより身近に感じさせ、地域社会全体で取り組めるようにする方法を模索することとなった。

### 3. 「JFAキッズサッカーフェスティバルin青森中央短期大学」の開催について

青森県サッカー協会キッズ委員会では毎年県内の各地域において5歳から10歳の子どもを対象に「JFAキッズサッカーフェスティバル（以降、キッズサッカーフェスティバル）」を開催している。青森県サッカー協会はこの活動を「だれでも気軽にサッカーの試合やアトラクションを体験できるイベント」とし、多くの子どもにその後のサッカーをはじめとした運動参加のきっかけをつくる目的で実施している。青森市においても毎年実施してきたが、学齢期（7歳～10歳）の子どもの参加が多く、幼児期（5歳～6歳）の参加が伸び悩んでいる状況にあった。そのことも影響し、年を追うごとにサッカー未経験の子どもの参加が少なくなり、地域クラブ等に所属しサッカーを経験している子どもの参加が多くなっていった。この状況が続くと本来の目的からずれてしまうことが危惧されていた。原田（2008）によると「運動体験は二極化しているといわれるが、子どもたちが運動と出会うところが極端に少なくしているわけではない。（中略）子どもの運動体験は運動遊びとしてでなく、スポーツとして子どもは運動と出会うことになったのではないかと解釈できる」<sup>9</sup>と指摘している。つまり、運動に積極的な子どもを除けば子どもにとって運動は以前よりもハードルが高くなっていると考えられる。キッズサッカーフェスティバルの状況についても、実施する側の意図に反して、参加する子どもにとってハードルの高い状態へと向かっていると言えよう。キッズサッカーフェスティバルにおける幼児期の活動は特に運動遊びとして運動体験できる場であることの方が望ましい。もし、キッズリーダー資格を有する保育者を目指す学生が、キッズリーダー資格と保育の学びを活かしながらキッズサッカーフェスティバルに協力できれば、参加するにあたってのハードルを下げることにつながりやすく、地域で子どもたちが運動遊びを体験できる場を増やすことにもつながる。その結果、青森の地域課題に広く貢献できると考えた。

そこで、青森県サッカー協会キッズ委員会の担当者と協議のうえ、平成30年度の青森市における

8 時本英知・鈴木寛康・畑山朗詠（2019）「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み（3）-運動遊びの指導実践における幼児の活動状況から-」青森中央短期大学研究紀要 32号, 189-198を参照。

9 杉山佳生（2008）「スポーツ体験を通して学ぶもの」児童心理第62巻第14号, 17-22, 金子書房を参照。

キッズサッカーフェスティバルより青森県サッカー協会と本学が共催し実施することとなった。会場は本学のサッカー場を使用し、開催日は本学の学園祭とし幼児保育学科のイベントとして位置づけた。この意図としては参加するハードルが高くなりつつある印象を下げることに、幼児保育学科の学生が関わるということで伸び悩んでいた幼児の参加を促進させることのねらいがあった。キッズサッカーフェスティバルへの幼児保育学科からの学生参加は、キッズリーダー資格講習会を受講している1年生については資格取得のための実習と位置づけ参加を促した。2年生については学園祭における実施イベントの都合上平成30年度の活動は不参加とし、令和元年度よりキッズリーダー資格を有している学生に対し参加の希望を募った。

キッズサッカーフェスティバル実施にあたり、青森市サッカー協会キッズ委員会に所属するキッズリーダー資格を有する指導者が学齢期の活動を担当し、幼児保育学科のキッズリーダー資格を有する学生が幼児期の活動を担当することとした。実施に向けて事前に青森県サッカー協会キッズ委員会のキッズインストラクターよりアドバイスを受けながら、学生が活動内容を検討した。その内容を実施2日前に会場となるサッカー場を使用して活動シミュレーションを行い、さらにアドバイスを受けながら活動内容を見直した。また、当日の開催に向けて学生自らの紹介ボードとウェルカムボードを作成し、参加賞の準備を行った。

本学におけるキッズサッカーフェスティバルの取り組みはまだ2回の開催であるため、その効果は明確に述べることはできない。ただ、幼児期を対象とした活動内容については以前よりも明らかにサッカーボールを用いた運動遊びという印象が強くなっており、サッカー協会の関係者からも他の地域で実施するキッズサッカーフェスティバルとは印象が異なるという話が聞かれた。印象の変化に関する賛否はともかくとして、幼児期の子どもの参加人数が2年連続で増加している状況にあり、参加に対するハードルは下がりつつあると考えられる。この取り組みを継続させ、地域で子どもたちが運動遊びを体験できる場の一つとして定着させることができれば、本学の取り組みがより一層地域課題への貢献に結びついていくと言えよう。

## おわりに

本稿では地域課題に対応できる保育実践力を備えた（あるいは備えられる）保育者を育成するために、本学のJFA公認キッズリーダー資格を活用した取り組みについて報告してきた。この取り組みと絡めながら地域に存在する大学として、保育者養成校としてどうあるべきかについて問題を提起しておく。

これまで多くの大学が様々な資格を取得できるように設定し、それを売りにしながら学生募集につなげてきた。この点については本学も同様である。しかし、資格を取得することは手段であり、目的にはならない。もしも目的になってしまったとするならば、それを達成した時に学生は進むべき方向性を見失ってしまう。そのため、学生が資格を取得を目指すにあたり「なんのためにその資格取得するのか」、「その資格をどのように活用するのか」について、学生が整理できるようにしなければならないのである。そのためにも、資格を設定する大学がその必要性について根拠を持って理解し、論理的に説明できなければならない。そこには当然地域の現状とのつながりを持った理解と説明が求められる。それができないのであれば、ひょっとするとその資格はその大学で設定する必要がない資

格、あるいは地域社会がその資格を求めていると捉えなければならないのかもしれない。

特に本稿で取り上げたキッズリーダー資格はカリキュラムに組み込んで設定している資格ではない。また、その資格だけで就職に結びつく可能性も低い資格である。だからこそ、キッズリーダー資格取得のための講習会の開催だけに留まらず、保育としっかりと結びつけながら取得した学生自らが活かせるように「スマイルチャレンジ」を設定してきた。そして、学生には将来保育現場で働く時に地域課題の貢献につながる保育という意識を持てるよう「キッズサッカーフェスティバル」を共催してきた。こういった取り組みこそが今の地域に存在する大学に求められる人材育成と捉えるべきである。

次に報告した取り組みは筆者が中心となり、青森県サッカー協会の理解をこぎつけ協力を得ることができた。いわば個人と団体との連携である。しかし、長期的に見た場合この状態では非常に不安定な状態であって決して十分な状態とは言えない。地域課題は一朝一夕で改善できない大きなものであるため、本学としても状況に応じて取り組みを改善し、継続的に取り組んでいくことが求められる。そこで必要になるのが大学と団体との連携である。本学もこれまで多くの自治体や学校、地域団体と連携協定を結んでいるが、その多くは事前に立ち向かう具体的な課題が共有されていないため機能していないものが多い。大学には教員という専門家がおり、それぞれが見出した課題や紡ぎ出した取り組みがある。それを基に賛同と協力が得られる団体と連携協定を結ぶことが本来の流れであろう。連携協定を結んでいるから何かするのではなく、何かを成し遂げるために連携するのである。そういった本来の流れを意識すれば、青森県サッカー協会キッズ委員会と本学幼児保育学科は同じ課題に向き合い、実際に協働しながら取り組んでいる。こういった既存の取り組みに着目することがとても重要と言えよう。

いずれにせよ、地域課題に貢献できる保育実践力を備えた保育者を育成するという取り組みを、本学幼児保育学科の基盤とし、本学が支えていく取り組みとして位置付けることで持続が可能となり、地域課題の解決につながっていくのである。そういった将来性のある取り組みを持続させてこそ、大学としても、保育者養成校としても地域社会に求め続けられることになると思う。